

Nick Adams 物語の分析的解釈 (II)

鴨 川 卓 博

An Analytical Reading of "Nick Adams Stories"—II

Takahiro KAMOGAWA

In Our Time の chapter VI の sketch に始まる戦傷回復期の4つの Nick の物語では、少年期青年期のそれらと比べて、1つの違いが見られる。これまで見てきた如く、¹ 明らかに Nick はいくつかの現実の相に遭遇する度に、それに対応する姿勢を学びとり、人間の生き方についての自覚をたかめてきた。この間に Nick の現実に対決する姿勢、行動態度に変化が見られるのである。即ち“The Indian Camp”の頃の初期の Nick は否応なしに現実を知らされる受動的な姿勢である。それが誰かに援けられてではあっても、単なる傍観者の立場から、行為者の立場(“The Killers”が少年期ではこの変化を代表している)に立つようになり、やがて行為者として自らの選択を行なうようになる。“The Battler”では alternatives は少ないが、それでも、前進する、後退する、及び場所によって協道にそれる、の3通りがあり、Nick は自ら選んで前進し、更に道をそれてもみる。又“The Killers”においては Nick は自らの alternatives を求めて、Sam の、George の、それに第3の道、のうちから自分のとるべき道を選ぶのである。更に Nick が Ole に色々と尋ねるのもこの alternatives 探索に他ならない。これらはいずれも Nick が自己の判断・自覚にもとづいて為す選択の例である。ただこの段階での Nick の行動は積極性という点から見ると、受動的 protagonist のそれとみられる。それが“Big Two-Hearted River”等では Nick は積極的に現実に対抗するという姿勢になる。自己の立場、現実の相に対して正確な認識を持ち、慎重に、然も能動的に行動し、未知に対しては慎重にこれを避ける積極的対抗者、能動的 antagonist の姿勢に移行する。Nick が試行錯誤を繰返しながら、この“Big Two-Hearted River”の能動的 antagonist の姿勢をとるに到る出発点が、この短い inter-chapter sketch での“a separate peace”の宣言なのである。その意味では Young, Cowley 等の負傷に対する注目は正しいと言えよう。

1

戦傷からの回復期の Nick を描いたものには“In Another Country,” “An Alpine Idyll”等も加えられるが、これらに登場する protagonist は“I”であって、Nick とは命名されていない。

¹ 拙稿「Nick Adams 物語の分析的解釈 (I)」(「鹿児島大学教育学部研究紀要」第19巻(昭和43年3月))参照。本稿は同稿の第2部を為すものである。

それ故、差し当り、これらを後回しにして読んで行くことにする。² Nick は身体上の負傷から回復するに従って、精神的な傷からも立ち直ることになるのである。“Now I Lay Me,” “A Way You’ll Never Be,” “Cross-Country Snow” がその回復の過程である。前2作はほぼ同じ時期のものであり、Nick はいずれの場合も身体的にはほとんど全快しているが、未だ軍服を着ている。3番目の物語では Nick は Swiss で、skiing をやっており、civilian となっているし、America への帰国を予定している。精神的には前2作が “Cross-Country Snow” におけるよりずっと不安定な状態であると見られる。

“Now I Lay Me” では Nick は負傷した時の恐怖が強く残っている：

... I had been living for a long time with the knowledge that if I ever shut my eyes in the dark and let myself go, my soul would go out of my body. I had been that way for a long time, ever since I had been blown up at night and felt it go out of me and go off and then come back.³

眠ると自分の魂が飛び去って行くのではないかという恐怖が、暗闇で寝ようとする時 Nick を襲う。そのことを考えまいとするのだが、恐怖に打ち勝つことが出来ない。結局何かを考え続けて、眠らずにいる (lay awake) 以外に方法はない。自分が鱒釣りに行った川、釣りの様子、川の状況等を思い浮べる。憶い出で釣りが出来ない時には、何度も何度もお祈りをし、自分の知っているあらゆる人の為に祈る。一人一人の為に Hail Mary と Lord’s Prayer を言えば随分時間を要し、ついには夜が明ける。明るくなれば安心して眠れる。

自分の経験して来たこと (“everything that had ever happened to me”) を思い起こす。戦争に行く前のことから逆に、時代を溯って、自分が記憶している一番古いこと一祖父の家の屋根裏一まで思い起こし、再び時間順に戦争の頃まで下ってくる。祖父が死んで後新しい家に移ることや、母が地下室の整理をやって、父が大切に保存しておいたインディアンの土器や鍬を焼いた時のこと等を思い起こす。祈りも続かず、思い出すことも出来ない時は、動物や鳥や魚や食物の名称、地名や通りの名を考える。そしてこれらのいずれも思い出せない時はただ耳をすませて物音を聴くのみである。

この物語で問題にされているのは、物語前半部の Nick の暗い夜の過ごし方と、後半の silk-worms のたてる音を聴きながら起きていた或る一夜の経験、及びその夜居あわせた「神経質で眠られない」an orderly との会話（「神経質」な世間一般の考えが示されている）である。この

²“I” が主人公になっているこれらの物語を Young はいずれも Nick 物語の中に入れてある。(Young, Ernest Hemingway (Now York: Rinehart, 1952), p. 30.) “Now I Lay Me” では “I” が protagonist であり、明らかに 1 人称物語であるが、“I” は父親から “Nick” と呼ばれる故、この “I” が Nick であることは明白である。これからの類推として、これらの 1 人称物語を Nick 物語に加えることは可能であり、恐らく妥当であろうが、便宜上別に検討することにし度い。1 人称物語と、これまで読んできた 3 人称物語である Nick 物語とでは、かなり判然とした差異があるが、これも Nick の伝記を検討することを第 1 目標として、その差異を現段階では無視することとする。

³Hemingway, *The Short Stories of Ernest Hemingway: The First Forty-Nine Stories and the Play The Fifth Column* (New York: Random House, n. d.) (以下 *First 49* と略記), p. 461.

両者の対立的な構成は、そのまま両者の経験、行動態度の違いに照応する。Nick はそれとは知らずに眠った夜もあるが、意識しながら暗闇で眠ったことはなかった。明りさえあれば、安んじて眠れるのに、そうでないと疲れて眠くても眠るのが怖い。これが負傷に起因するもので、精神的なものであることは、物語の開始部と結末部に示される。そしてこの様に客観的に示されていることは、この恐怖の実態が Nick には (かなり) 正確に把握されていることを示している。然しこの物語では Nick は恐怖に正面から挑戦して対決するという姿勢をとらない。自分の精神状態に対する正面からの対決は、その状態における自己の否定であり、それは Nick にも出来ない。消極的ではあるが、恐怖状態に陥らない方策を講ずる以外の方法はない。即ち何か、恐怖そのもの以外に精神を集中することである。Nick のこの時点での立場は、肉体的負傷が精神に残した影響との対決なので、その影響を受けた精神を強化することが、最良の療法なのである。この精神強化の為に Nick がとった方法は、精神を集中して自分の過去の経験を思い起こすことであった。過去のことを思い出すということは、自分のこれまでの学習の復習であり、それによって自己の立場を再確認することである。彼が行なう trout fishing の rehearsal が “its whole length” にわたるもので、“very carefully” に為されることは、このことを裏書きする。川の状態、釣の進行状況、餌についての知識・経験—なかでも餌を取る時の話は、物事に対処する人間の採るべき基本的態度を示している。餌をさらせて、自分で釣り上げた鱒を刻んで代用したり、salamander や cricket を使わなくてはならないようでは困る。神に祈るのも、自分の心を強める手段であり、そのことは彼が自分の知っている人一人一人の為に祈禱することでも判る。祈ること自体よりも、正確に自分の過去を振り返り、環境を把握することに意味がある。それに続いて語られることも全て、自分の知識・立場の確認を意味している。

物語後半は Nick と orderly (当番兵) の会話から成っておる。orderly は自分は他の兵士達とは違う、自分は「神経質」だと言い、それ故に眠られないのだと考えている。事実は本人の言う通り「神経的」で Nick と話をした後で、すぐに躰をかき始める。彼は Nick に眠られない理由を尋ね、結婚を勧める。これが普通の人間の不眠に対する対策なのである。だが皮肉なことに、この orderly の結婚の話は Nick に新たな精神集中、精神強化の手段—知っている娘達のことと、その娘がどんな wife になるかを想像することを教える。この部分の Nick と orderly の会話の違いは、2人の心的立場、自覚の違いである。

このような Nick の努力は、これより後の “A Way You’ll Never Be” や “Big Two-Hearted River” と比べて見ると、その意味や位置が理解出来る。“A Way You’ll Never Be” では Nick は自分が狂乱 (錯乱) 状態にならないように努力しているにもかかわらず、何度も我を忘れそうになる。してみるとこの “Now I Lay Me” において Nick が怖れる “my soul would go out of my body” は literary meaning の他に錯乱状態に陥ることを怖れていたことも示しているのである。暗闇で眠れないのは錯乱の暗闇に自己を喪失し、見失うことを怖れていたことである。そう見て来ればこの物語で Nick が行なう自己再確認の努力も首肯出来る。又この物語後半で or-

derly と話し、その中で自己の恐怖・不眠について “‘I don’t know, John,’ . . . ‘I got in pretty bad shape along early last spring and at night it bothers me.’”⁴ と答えるのは、自分の状態を他人に語れる段階にあることを示している。⁵ Nick が自己を steady に保つ為行なう精神集中の手段が trout fishing の rehearsal であり、過去の自己を振り返る内省の行為なのである。そしてそのうちで最も有効なのは一最後まで繰り返し行ない得るのは trout fishing であり、祈禱である。Trout fishing にこのような healing effect があることは、次の物語でも “Big Two-Hearted River” でも示される。又 “Big Two-Hearted River” での Nick は祈禱を行なわない点を考え合わせると面白い。そしてこれらは “Big Two-Hearted River” の理解に示唆を与える。

“A Way You’ll Never Be” では Nick はやはり暗闇では眠られないし、未だ精神的に不安定な面があるが、より良く現実に対処することが出来るようになっていく。物語開始部で、極めて正確に自分の立場を把握しながら最前線に出かける Nick は、死体の散らばり方から戦況がどのように展開したかを見てとることが出来る程である。所が、自分が明りが無いと眠れないと、かつての戦友の Captain Paravicini に告げる時、この自覚はあやしくなり、不十分であることを暴露する。

“ . . . What’s the matter? I don’t seem crazy to you, do I?”

“You seem in top-hole shape.”

“It’s a hell of a nuisance once they’ve had you certified as nutty,” Nick said.

“No one ever has any confidence in you again.”⁶

そして自分がこのように感じたことに失望する。自信を失うのである。古い経験を思い起こすが、今度はより断片的で、恐怖、錯乱の直接原因である戦争一負傷の頃が中心になっている。“Now I Lay Me” で意識的に避けたと思われる負傷の場所、Fossilta の郊外の川辺—水量の増した川辺—、そこにある “a low house painted yellow with willows all around it and a low stable”⁷ が現われる。このことは自分の恐怖の源に触れることで、それはそのまま錯乱状態に通ずることを意味している。Nick が自信を失った時、最初に連想することが砲撃された時の dugout の兵士達の混乱した hysteric な様子であることが、これを証明する。Nick は口数が多くなり、兵士達に自分の訪問の目的を話しているうちに脱線して、自分が何をしゃべっているのか判らなくなる。そして話は trout fishing 用の餌にする locust の説明になる。これは錯乱した精神の自衛行為とも言える。やっと正気に戻った Nick は Paravicini に帰った方が良いと言われる。

“All right,” said Nick. He *felt it coming on again*.

⁴*Ibid.*, p. 467.

⁵この自分の状態を他人に語るのに “A Way You’ll Never Be” では、自分が crazy であると言われたことに言及しているのと比べて、こちらの方は未だ曖昧である。

⁶*First 49*, p. 505.

⁷*Ibid.*, p. 506.

“You understand?”

“Of course,” said Nick. He was *trying to hold it in*.

“Anything of that sort should be done at night.”

“Naturally,” said Nick. He knew he *could not stop it now*.

“You see, I am commanding the battalion,” Para said.

“And why shouldn’t you be?” Nick said. *Here it came*. “You can read and write, can’t you?”⁸

そして旧友 Paravicini に憎まれ口をきく。彼は目を閉じる。その時再び “the white flash and clublike impact, on his knees, hot-sweet choking, coughing it onto the rock” を感じ, “a long, yellow house with a low stable and the river much wider than it was and stiller”⁹ が目に浮ぶ。彼には最前線は未だ戻るには早すぎ、彼の精神は十分に回復していないのである。物語発端部において示された Nick の精神のみかけの健全さは Paravicini にその不健全なことを指摘されると、たちまち不健全な状態に逆戻りをしてしまうのである。恐怖の源に触れてみる程度にまでは回復していても、恐怖を克服はしていないのである。“Big Two-Hearted River” で慎重に自己の弱点を避ける Nick は、この回復途上の失敗を再び繰り返すまいとする態度である。更に回復への努力が為され、自己の立場を取り乱すことなく理解・確認出来るようにならなければならないのである。

“Cross-Country Snow” の Nick がその段階を示している。この作では、物語開始部で Nick は自分のやっていること、周囲の状況、友人 George の様子等を正確に観察している。自分がスピードを出し過ぎていることも承知している。この部分での Nick の失敗は “He would not let go and spill.”¹⁰ と過分の自信を持つことである。彼が知っている限り、観察した限りでは正しくても、未知の要素のあることを失念した Nick は、軟かい吹き寄せられた雪の所に来て転倒する。然しその後は、自分の身体状況（足の負傷の為、未だテレマーク転回が出来ない）、周囲の状況（崖上の雪の様子、下り坂の終点に wire fence があって、そこで転回せねばならぬこと）を George に尋ねたり、判断したりして、慎重に行動する。彼の観察も判断も正鵠を得ている。Waitress の妊娠を最初に見落した Nick は「何故見落したか」と反省し、同時に彼女の “touchy” な原因まで見抜く。然し Nick は、これから先のことについては自信がなく、判断も正確でなくなる。States に帰ることも「多分そうなると思う」ことだし、「知らない」ことが多くなる。丁度彼等が目の前にしているブドウ酒の瓶やグラスが「カラ」であるように。

Nick は skiing に強い執着を示しており, “‘There’s nothing really can touch skiing, is there’”¹¹ と George に言い, George が “‘It’s too swell to talk about.’” と言い, 何時までも skiing を楽しむことを希望するのに同意する。約束することは無意味であるが, skiing には

⁸Ibid., p. 511. イタリックス筆者。

⁹Ibid., p. 512.

¹⁰Ibid., p. 281.

¹¹Ibid., p. 283.

「ぜひ行かなくてはならない」のである。この執着は skiing が fishing 同様,¹² 確実に自己の立場を認識し、自分の精神が go astray するのを防ぐ方途であることを Nick が承知している故である。

精神を強化する為に自分の恐怖の源に立ち向わず、近づかず、何か他の事—skiing や prayers や fishing に没頭することは、然しながら、一種の逃避である。“Big Two-Hearted River”にこの Nick in escape の姿を見るのは当然である。

2

“Big Two-Hearted River”は1つの連続した物語であるが、別々の題名を与えて2つの物語にしても別に支障はないようである。この作品では作家になっている Nick が、或る人の住まなくなった町の駅で列車を下りてからほぼ2日間の彼の行動が取り扱われている。Nick は唯1人で1年前 (Nick は知らないのだが) に焼けてしまった田舎に鱒釣りに出かける。Part I は列車を下りてからその釣り場に到着して Camp を設営し寝るまでの第1日目の Nick の行動である。彼が自分の装備と共に下車した場所は、かつて Seney という町のあった所であるが、今は一面の焼野原である。彼が何年ぶりかで戻って来た所が焼野原であることは、Nick が唯1人で釣りに来たこと (彼はこの物語で友人と The Black River で釣りをしたことを思い出す) と共に、Nick が何事かを逃れて、個としての自己の立場を確認、確立しようとしていることを象徴的に示しているとみられる。彼はここに来たことが嬉しい。全てを後にして、ここに来たことを幸福だと思う。過去を、恐怖の源を。

... Nick felt happy. He felt he had left everything behind, the need for thinking, the need to write, other needs. It was all back of him.”¹³

Nick は辺りが焼けて様子が変わってしまっているが、自分の居る場所を知っており、川の位置を知っていた。このことは Nick が自分の過去の経験・学習から、現在自分の置かれている立場を確実に承知していることを示している。彼は Camp 地に着くまで非常に苦勞をして進む。この苦勞、この ritualistic な前進は Nick の学習の苦勞と、負傷からの回復の苦しみを示しておると共に、この Part 全体の持つ意味—Nick の自己確立の ritual—をも示している。Part I がほとんど独立した物語であるにも拘らず、唯 Nick の鱒釣りの準備の行為と観察だけで終わっているのは、この Part の狙いが Nick の settlement にあることを明らかに示している。一見何事も起こらぬこの Part の Nick の行為も、実は Nick にとっては大変困難な自信回復と新たな自己確立の儀式なのである。それ故に遂げた時に喜びを感じるのである。

He had not been unhappy all day. This was different though. Now things were done. There had been this to do. Now it was done. It had been a hard trip. He

¹²Nick が George が何時までも ski を楽しみ度いと言うのに応じて自分が skiing に行き度いと言う場所は夏 fishing に行った場所であるのは興味深い。

¹³First 49, p. 308.

was very tired. That was done. He had made his camp. He was settled. Nothing could touch him. It was a good place to camp. He was there, in the good place. He was in his home where he made it.¹⁴

そして空腹を感じるのである。駅から Camp 地までの旅は、従って、Nick にとって色々な労苦、誘惑を持つ自己制御・自己確立の儀式的旅なのである。Camp 地に向って歩く時、1歩1歩自分の行動を確認し、それを自己の規範に照らして是認する慎重な態度、鱒を見て心をおどらすが自制すること、grasshoppers の様子を見てそれから火事のことを推測判断すること、coffee を沸かす時その方法についての確認を為すこと等が Nick のこの姿を示しているのである。この自制と観察と判断が Nick に彼の居る位置を一目で見渡たせるような “a piece of high ground” を Camp 地として選ばせ、彼に “good place” と言わせ、「家に居る」と感じさせるのである。この土地が牧場や stretch of river や swamp を見渡たせることは意味が深い。この様な位置に、この様な方法で自己確立をする故、夕食を食べる時 “I’ve got a right to eat this kind of stuff, . . .”¹⁵ と言えるのである。

この物語で Nick の観察が正確であることは、戦傷以後の Nick と共通であるが、この物語で初めて自分の行動をはっきりと是認し、自己の行為を賞讃する。自分の行動の規範をその程度にまで確立したのである。

Part II は餌にする grasshoppers を集め、食事をしてから、鱒釣りをし、そしてその日はこれまでと打ち切るまでの第2日目の Nick の観察と行動である。ここで問題になることは、grasshopper を集める時や、breakfast の準備をする時の Nick もさることながら、実際に川に入って釣りをする Nick により意味があるように思われる。針にかかった小さな鱒を逃がしてやること、これまで見たこともない程大きな鱒がかかった時の Nick の動揺（確立した筈の自己の立場の動揺・喪失）、その結果としての失敗（leader の切断、鱒の逃亡）、2匹の満足すべき魚を釣り上げること、川の様子を観察・判断、自分で判断出来ない彼に未知の swamp を避けること等の意味は、学習途上の Nick の努力と、その結果と限界とみられ、又 Nick の成長度を示していると思われる。

この段階での Nick は trout fishing を極めて ritualistic にやることを通じて、彼の行動の規範を確立しようとするのである。川に入るまでの準備や、最初の1匹を逃がしてやる時の周到的な配慮がこれを示している。だがこれが未だ十分に確立されていないことは “He felt awkward and professionally happy with all his equipment hanging from him.”¹⁶ と不安定な気持を持つことで最初から示されており、2度目に餌をつけた時幸運のまじないをしたり、大きな鱒がかかった時に、彼が興奮し、動揺し、「気分が悪く」なり、座ったほうが良いと感ずることから判断

¹⁴Ibid., p. 313.

¹⁵Ibid.

¹⁶Ibid., p. 321

される。従ってその後で彼は川から上って、再び彼の居る位置を確認し、the feeling of disappointment の去るのを待たなければならない。そしてその後で初めて満足出来る鱒を釣ることが出来るのである。彼には自分の失敗の原因が判っており、彼の学習の限界を承知しているのである。次の2匹を釣る時の慎重な手順や、swamp に入って行かないことがこれを示している。この swamp は彼には未知なものであり、彼の目には（人間にも、太陽の光にも）impenetrable に見えるのである。彼が swamp を眼前にした時、本を読み度いと思うのは興味深い。体験的に学習出来ない時、未知に直面した時、読書が力強い教授者となるのであろう。もっと学習を重ねた時 swamp に入って行ける日が来るのである。

戦傷期以後の Nick の学習・努力は、彼自身の持つ人間としての不条理との対決でもあった。そのことは“A Way You'll Never Be”での錯乱状態の Nick 自身が、彼の努力にも拘らず uncontrolable なもので、彼の努力と人間としての誇りを裏切るのである。“Cross-Country Snow”でも“Big Two-Hearted River”でも、彼は十分注意しているのに失敗をする。それ故にこそ、彼は自分の行動に厳しい制約を課し、自己の行為を1つ1つ ritual の如くその是非を判断するのである。自分のこれまでの学習から得た judgment に適う行動を是とし、それに自信を持つ Nick と、自己の弱点とそれに基く制約・代替という「2つの心」を Nick 自身の中に持つのである。積極的に現実を直視し、それと対決しようとする antagonist の行動の aesthetics といえよう。

3

Nick の伝記の一番最後を構成するものは“Fathers and Sons”である。“A Way You'll Never Be”に見られた物語の筋と思い出・連想を思い切って混ぜ合わせた手法で、人間の意識の赴くままに作品を展開する。従って作品の雰囲気としては Nick の伝記上この作の前に位置する“Big Two-Hearted River”とは相当に異なる。連想・回想が多く作中に入って来る点は、自己の経験の復習としての位置づけの上でこれらの作品に共通であるが、“Fathers and Sons”においてはその意義が異なっている。これまでの Nick の復習は自己の学習の為であったが、今度は自分の息子の教育・学習に際して行われるのである。作の題が複数形であるのは、父親と Nick、Nick と息子の2つの「父と子」の関係のあることを示しているものであるが、このことは、又 Nick の学習と息子の学習との重ね合わせも意味している。この物語で38才になった作家 Nick は息子を連れて田舎町の辺りを車を走らせている。「回り道」の表示のある町の入口を、その指示を無視して通り抜け、秋の盛りの畑のそばを走っている。彼はその畑や木の伐られた林を見て、うずらの巢の位置や鳥の飛ぶ方向を想像し、心の中でうずら狩りを行なっている。その時彼は自分に hunting を教えて呉れた父のことを思い出す。息子を傍らに座らせた Nick は自分の少年時代に父から教わった事、父が教えることが出来なかった事を思い浮べる。無意識のうちに¹⁷

¹⁷Nick は自分が父のことを思い出し、自分が父に教えられなかったこと一性への開眼の経験を思い出している時息子の存在を完全に忘れてるのは、彼が無意識に比較をやっていることを示す。

Nick は自分の受けた教育と、自分が息子に与えているそれとの比較を為すのである。従ってこの作は Nick の伝記のうちで、父親 Nick の自分の父親についての再認識・再評価を通じて為す学習と、少年 Nick の学習の記録という2つの性格を持つ。父親が Nick に教えたこと、教えることが出来なかったこと、父親が Nick に対してもっていた意味—Nick が教師として尊敬し、その長所を認め、感謝もした父、又反抗し、それから独立しようとした優越者としての父（父の小さくなったシャツを着ることを嫌い、捨てることはこの Nick の姿を示す）、Nick が未だ父親のことを書けない理由となっているその死—を自分の子供の教育に際して改めて考え、父親としての自分の取るべき立場を学習する Nick の姿が描かれているのである。そして同時にそうすることによって、これまでの Nick の伝記の中で欠けていた fishing, hunting と sex への initiation を語ると共に、更に成長した Nick のこれまでの父親観をも示している。

Fishing と hunting の手ほどきは父親の Nick に対する教育の sound な面で、Nick は今でも父に感謝している。Fishing が skiing と共に負傷した Nick の recuperation に効果のあることを見れば、この soundness は単に父親がうまく教えることが出来たというだけではなく、その教授の内容が sound であることをも意味する。一方 sex への initiation は父親がうまく行なうことが出来ず、教えた内容も Nick に正しく理解されなかった unsound なものであった。Nick のこれに関する初期の学習がそうであったように、これは所詮 “. . . each man learns all there is for him to know about it without advice.”¹⁸ なのであろう。そして Nick のこの self-education は Indian camp の後の森で為されたのである。Nick は今でもこの森に行く道を良く憶えているが、その道が複雑なのは、この education の過程が intricate であることを示している。

Nick の sex への開眼は既に “Ten Indians” で恋の経験が述べられておるし、今度が初めてでないことは、この物語で初めての sexual intercourse の体験が語られる時、“again” という語が使われていることで示される。¹⁹ Nick の伝記の上で “The End of Something” の前に位置するとみられる “Ten Indians” における Nick の性への開眼は、伝記の年代にふさわしく、極めて幼稚で単に未知に対する好奇心といったものであった。彼は彼の girl である Indian 娘 Prudence Mitchell との関係を友人から tease され “hollow and happy”²⁰ と感ずる。だが帰宅後父に彼女が他の少年と quite a time を過ごしていたと聞かされて失恋を知る。然し、この恋も失恋も彼自身が友人に tease された時、彼女との関係を否定していることから見ても、単に彼の想像上のもので、“‘If I feel this way my heart must be broken.’”²¹ という程度のものである。従って、翌朝起きた時には彼が失恋したことは忘れていた。その意味では “Fathers and

¹⁸ *First 49*, p. 588.

¹⁹ *Ibid.*, p. 591.

²⁰ *Ibid.*, p. 430.

²¹ *Ibid.*, p. 434.

Sons”の思い出の中の少年 Nick が sex そのものへの手ほどきと、その面での開眼を示しているのである。

この物語では Nick は2度 sexual intercourse を行なうが、その初めのものはほとんど何の意味も持たない。相手の Indian 娘 Trudy は兄 Billy の眼前での行為を嫌わず、従って行為の後の Nick の感懐は“Ten Indians”で感じたと同じ“hollow and happy”²²である。Nick が2度目の行為の際 Billy に「あっちに行け」と言うことは、彼が行なうことが子供の性戯から大人の性交へ展開していることを示す。従って終わったあとで彼等は「子供が生まれる」ということを話題にする。前回には全然これが話題にならず、話題になったのは shooting に関することであった。この大人への成長に必要な process は Nick が想像の中で Trudy と Billy の兄 Eddie を射殺し、そして又その命を助けてやるという行為を為すことであった。自己の個有の意志で他人に立ち向い、然もそれに superior の立場に立つ「自我」の目覚である。それ故 Billy の見ている所で Trudy に求められても、再び子供の性戯を為すわけにはゆかぬ。“... he was a man now.”²³なのである。この2度目の性交が Nick に齎らした感懐は“Something inside Nick had gone a long way away.”²⁴であり、“... the great bird flown like an owl in the twilight, ...”²⁵なのである。(Hemingway が性交時における climax を表現するのにこのような喩えをするのは、その感覚を副詞の羅列で表わすことと共に、*For Whom the Bell Tolls*において更に良く示されている。)これを前回の行為の後の感懐と比べれば、その意味の違いから Nick の成長が知られる。Nick が自分の「大人」への成長と sex を密接に結びつけて思い出すことは、これが父親(大人)が彼(子供)に教えるのに失敗した故であり、彼自身(大人)もこのことを息子(子供)に語れないことを示している。

“It’s hard to say,” Nick Adams said. Could you say she did first what no one has ever done better and mention plump brown legs, flat belly, hard little breasts, well holding arms, quick searching tongue, the flat eyes, the good taste of mouth, then uncomfortably, tightly, sweetly, moistly, lovely, tightly, achingly, fully, finally, unendingly, never-endingly, never-to-endingly, suddenly ended, the great bird flown like an owl in the twilight, only it daylight in the woods and hemlock needles stuck against your belly.²⁶

蓋し、sex 同様「自我」は自ら学びとられ、大人には自ら成長しなくてはならないのである。Fishing や hunting とはその点で違うのである。

Nick が父親のことを思うことは、父親が Nick に一種の obsession となっていることをも同時に示していると見られる。殊に父親が“sound”であった面—fishing, hunting—で。父の眼が

²²*Ibid.*, p. 591.

²³*Ibid.*, p. 592.

²⁴*Ibid.*, p. 593.

²⁵*Ibid.*, p. 595.

²⁶*Ibid.*

異常に良かったことは Nick に対して 2 つの意味を持つ。1 つは父が Nick より明らかに hunter として優れた素質を持っていることで、それが Nick に劣等感を与える。他の 1 つはそのような優れた素質を持つ人の常として nervous であり、それが彼を “a trap that he had helped only a little to set”²⁷ にかかって死なせる “bad luck” となっているのである。父がこの “trap” にかかって自殺することは Nick に強い obsession を与え、Nick はそれ故未だ父の事を書けない。父親は彼なりに自分の生き方をしており、²⁸ それは確かに “a good story” になる筈ではあったが、Nick は未だそれを作品に書いて、いつも彼がやって来たように、“get rid of it” することが出来ない。これは父親の死が Nick に強い obsession となっていることを示すと共に、この作の今 1 つの問題点—即ち作家 Nick の創作観及び創作習慣をも示している。²⁹ Nick が父親の墓に詣でることが出来ないのも、父の死が obsession となっていることを示す。

このように父親 Nick は息子に Indian のことを尋ねられて、自分が父親として、手ほどきをする者として “unsound” な面を持っていることを知ったが、そのことが自分の父親に対する認識を改め、obsession から解放される第 1 歩となるものである。更に息子に Nick の父の墓に詣でることを要求されて、この unsoundness を決定的に自覚させられる。墓に詣でることは、父親について、その死について書くのと同様、それを客観化するという意義があり、obsession からの解放、その生き方をそれなりに認めることを意味するのである。従って Nick は “We’ll have to go. . . . I can see we’ll have to go.”³⁰ と息子の言うことの正当性を認めざるを得ない。こうしてこの物語では教授者としての学習が示されるのである。

4

以上の Nick (Nicholas) Adams という名を持った protagonist の登場する物語の他に Nick の伝記を構成するとみられる 1 人称体の “I” stories がある。“Now I Lay Me” については既に分析を行なったが、この他に “The Light of the World,” “In Another Country,” “An Alpine Idyll” がある。この他にも 1 人称物語はあるが、“A Natural History of the Dead” を除いて他は “I” は単なる observer で narrator であるに止まり、Nick の伝記上何らかの位置を占めるとは考えられない。“A Natural History of the Dead” の位置づけについては、それが「博物誌」であるという性格上、伝記のある一時期を画すというよりは、或る年令（恐らく相当の年配）に達した Nick の「死」に対する考え方、生死観とでもいべきものを示していると考えべきである。そうすると invisible “I” の存在する sketch 的なもの—その典型は *In Our Time* における短い inter-chapter sketch—と同じものと考えられる。それ故 Nick が何等かの姿でその

²⁷*Ibid.*, pp. 587-588.

²⁸Undertaker が父の死顔を make-up する時、彼等はほんの certain dashingly executed repairs をしただけで、顔は永い間かかって making itself であったことから明らかである。

²⁹Young, *op. cit.*, p. 33.

³⁰*First* 49, p. 597.

story の一部に加わるこれまでの Nick 物語とは異質のものとなっている。Nick の伝記を構成するものは必ずしもその語られている事件そのものに Nick が直接参加してはいない場合もあるが、何等かの形でそれに立ち合っている。我々はこれまで Nick 物語の中で Nick が傍観者ないし観察者としての protagonist から受動的行動者へ、更に能動的対抗者へと展開して行く姿を見てきた。これらは “Now I Lay Me” を除いて全て 3 人称体で語られており、上述の如き発展を描くのに客観的視点の存在を装っていた。1 人称視点で語る物語は “I” が単なる narrator であるよりは、“I” 自身がその語られる物語の protagonist でもある場合に一層その有効性を発揮出来るものである。ともすれば 1 人称物語では当然 narrator-protagonist は観察者・傍観者ではなく、少なくとも受動的行為者でなくてはならない。語られている事件・出来事に何らかの形で関与 (partake) していなくてはならない。今 “Now I Lay Me” をも含めて、これらの 1 人称物語を見てみると、これまで読んで来た 3 人称体の物語と比べて、特に protagonist が能動的であるとも積極的であるとも考えられない。“Now I Lay Me” で Nick が眠られない自分の努力について、その能動的対抗者としての姿勢で語ることを除けば、他の物語はむしろ “I” は observer 的である。してみると、これらの物語が 1 人称体である理由が問題となる。これが単に作者の恣意によるものでないとするれば、我々はこれの物語に他の Nick 物語や他の 3 人称体の物語と異なった何かを見る筈である。これがこれらの物語の理解に役立つことは明らかである。これらの物語に共通なことは、既に述べた如く、“I” が observer 的であることである。一方 “I” story として “I” は partaker であることを要求されてもいる。然らば如何なる形で “I” は partake するのであろうか。先ず “Now I Lay me” はその典型として “I” は “I” 自身を観察し、前半で “I” 自身の心の闘いに加わり、後半で orderly との会話に加わる。然しこの後半で重要なのは “I” が会話に際して orderly の説に対して為した反応である。“I” は orderly の説にも拘らず、心の中の闘いで新たな enforcement を得たのである。“I” は会話に加わったが、その会話は “I” に直接的、外面的参加ではなく、精神的参加を求める結果になった。その他の “I” 物語においても “I” は語られている事件・出来事そのものに直接参加することはしない。このことは “I” が事件に精神的 level で partake していることを示すものと考えられる。これらの短篇を Nick という名が protagonist-“I” に与えられていないにも拘らず、Nick の伝記の一部を為すと考える場合には、この考察は重要かつ不可欠である。即ち “I” は observer として事件を観察し、然もその事件に精神的に参加しているのである。“I”-Nick の initiation という観点から、Nick が何を、如何様に学び取ったかを示す故である。それ故これらを既に見てきた Nick の伝記の上に位置づけして読んでゆくことにする。“I” の年齢、負傷の回復の度合等から “The Light of the World,” “In Another Country,” “An Alpine Idyll” の順序となり、それぞれ、家を離れている少年 Nick、戦傷からの回復期 (肉体的 therapy を受けている時期)、負傷から精神的にも回復しようとしている時に相当する。

“The Light of the World” は “I”, 即ち Nick, が17才の時³¹ の物語で, “The Battler” よりは後で “The Killers” とほぼ同時期のものである。友人 Tom と一緒に Nick は旅行をしている。ある町の bar (或は安食堂) に入って, その bartender に追い出される。Bartender はこの2人の恐らくは浮浪少年の実態を見抜いたので, 店に居られると困るので追っ払ったのである。Bartender が2人が入って来るのを見て, free-lunch bowls—その中には pickled pig’s feet が入っている—の蓋をすること, そして2人を punks と言い stink と悪口を言うことがこのことを示している。この時 Nick は, このいわば向うから来た Nick には理由の無い無茶 (現実世界, 現実生活の不条理の1つの相) を避けようとする。彼は腹を立てる (いくら腹を立てても勝ち目は無いのであるが), そして Tom に “Listen. . . Let’s get out.”³² と言う。この物語で “I” の観察した主たる出来事ではないこの部分は, こうした “I” 即ち Nick の位置づけと見られる。2人はそこから鉄道の駅の待合室に行く。そこで彼等が見たものは, 少なくとも Nick が家庭に居ては学ぶことの出来ない, 出会うことのない人間性の一面であった。Five whores, six white men それに four Indians の居る待合室が Nick がこれまでに知らされていなかった sex の持つ多くの面のうち1つを Nick に教えるのである。Nick は “Fathers and Sons” において子供らしい性戯から大人の性愛への initiation を記録しており, 年令的には未だこの時は Michigan の自分の家に居るから, この “The Light of the World” におけるよりも年が若い。従って, この時 (“Fathers and Sons”) の Nick の initiation は 「sex そのものへ」 であって, 「sex の意味するものへ」 ではなかった。今 “I” (Nick) は現実社会における sex の姿とその意味を知ることになる。

彼等が入って来た時, 1番最初に声を掛けたのは顔や手の色が白く, そこに居あわせた白人の1人に 「いつも lemon juice をつけているんだ」と言われる程のほっそりした手を持った cook であった。彼はその場に居た樵の1人に “He’s a sister himself.”³³ と言われる通り, homosexualist で “I” 等2人の若者に興味を示す。この cook と対称的な位置を占めるのが5人の whores であるが, 中でも 350 pounds はありそうな女である。Cook が, 自分がからかわれた時に笑ったこの女に文句をつけて, “You big disgusting mountain of flesh.”³⁴ とののしることでこの関係が示される。娼婦達がここに居ることは, sex が人間社会の墮落と醜悪の象徴となっていることを示している。殊に5人のうち5人まで不自然さ, 異常さを持っている点からそう言える。5人のうち3人は最初の女同様太っており, 250 pounds は十分あり, 太った3人とも見る方向によって色が変わって見える服を着ている。この “changeable silk dress” は deceptiveness を示すとみられ, 見る人間は, どれが真の姿か判らなくなるのである。残りの2人は髪を per-

³¹Nick (“I”) は年令を聞かれて, “We’re seventeen and nineteen.” (*Ibid.*, p. 485.) と答える。Nick が nineteen とも取れるが, 作中 Tom の方が Nick より積極性があることを考え合わせると Tom を年長と考える方が適当と思われる。

³²*Ibid.*, p. 483.

³³*Ibid.*, p. 484.

³⁴*Ibid.*

oxide で blonde に見せている、その他の点では普通の娼婦なのである。paroxide の意味は changeable silk dress と同じである。1番太った娼婦も Nick 達に親しみと興味を示す。そして、自分を、更に仲間を2人に紹介する。ここに homosexual 対 heterosexual の対立関係が、どちらも不自然、異常な姿で持ち込まれる。“I” 即ち Nick はこの物語で sex の社会的意味—whores がその実在と存在意義を示し、その不自然な姿が虚偽と醜悪を示す—を知らされ、更にこの対立関係でその倒錯が示される。

話題がたまたま Steve Ketchel なる champion boxer のことになると、paroxide blonde の1人が、自分が Steve の愛人であったと言い始め、Alice と呼ばれる 350 pounds の娼婦も、自分こそ Steve の恋人だと主張して、口論になる。お互いに “You big mountain of pus.” “You dried up old hot-water bottle.”³⁵ とののしり合う。我々読者はどちらが正しいのか、或は相方共正しくないのか知らされないのであるが、この2人の娼婦達の主張の底にあるものは、前者では “We were married in the eyes of God and I belong to him right now and always will and all of me is his. I don’t care about my body. They can take my body. My soul belongs to Steve Ketchell.”³⁶ という考えであり、娼婦の心底にある生きがいとも、心意気ともいふべき倒錯心理であり、後者では “I remember when he said it [‘You’re a lovely piece, Alice.’] and I was a lovely piece then exactly as he said, and right now I’m a better piece than you.”³⁷ という思い出と、競争心である。美しい声をした Alice は、paroxide 同様、自分の memory—恐らくそれは自分で創り上げた illusion なのであろう—のみを抛り所に、倒錯した人生を生きているのである。Nick はこのような Alice の顔を見て、“she had about the prettiest face I ever saw.”³⁸ と思う。Tom はこの様子を見て、“Come on. Let’s go.”³⁹ と “I” をうながす。更に Tom は cook に向って、自分達が行くのは “The other way from you.” であると言う。こうして Nick は倒錯した sex の世界から、illusion の世界から離れることになるのである。かくして我々は Nick の学習の物語の中で sex の意味と、その倒錯した姿への initiation という他の Nick 物語に欠けている部分を補うことが出来るのである。

“I” 物語のうちで次の期になる “In Another Country” は、これまでの伝記のうちで欠けていた戦場での負傷と “a separate peace” の宣言 (*In Our Time* の Chapter VI の inter-chapter) と、負傷に起因する恐怖心の為夜眠られなくて苦しんでいる “Now I Lay Me” の間の Nick の病院における肉体的回復期に相当するものである。この物語の “I” が Nick であることは前の作よりはずっと明らかな根拠が与えられている。“I” は Milan の病院で外傷の治った後 rehabilitation の為、「足」の機能回復訓練を受けている。“I” の負傷は膝部であり、未だその膝が曲らな

³⁵ *Ibid.*, p. 488.

³⁶ *Ibid.*, p. 487.

³⁷ *Ibid.*, p. 488.

³⁸ *Ibid.*, p. 489.

³⁹ *Ibid.*

い。“Cross-Country Snow”でも Nick の「膝」は telemark に必要な程度に曲げることが出来ない。“I”の訓練を受けている現在、戦争は未だ続いておるが、“I”は separate peace の宣言をした状態であり、未だ“A Way You’ll Never Be”の Nick の様に前線に帰って行かない。“... The war was always there, but we did not go to it any more.”⁴⁰ “. . . There was always the war, but we were not going to it any more.”⁴¹ と2度も separate peace の宣言を確認する。更に“I”は死ぬことを非常に怖れており、夜1人で寝ていると死ぬのではないかと心配になる。そして暗闇が恐く、夜帰宅する時 street light の近くを歩くことにしている。以上の点は全て“I”が Nick の伝記上で丁度この物語が cover している時期の Nick に相当していることを示すものである。

この作品で Hemingway の求めた themes の1つは、後に彼が *A Farewell to Arms* (1929) で追求したもので、そのことはこの長篇のドイツ語版の題名がこの短篇と同義の *In Einem Andern Land*⁴² であることでも明らかであるが、この短篇においては、学習者としての“I”即ち Nick が居る点、Nick の伝記物語としてのこの短篇の位置を示している。尚この題名が Marlowe の *The Jew of Malta* から取られたものであることは Young によって指摘されたのであるが、その詩行から相手の女が死ぬことが暗示されている。⁴³ この作で“I”(Nick)は負傷後の機能回復訓練を受ける為毎日病院で訓練機を使って膝を曲げる練習をしている。そこに集る同じような patients の中に1人の major が居る。又他に“I”同様の medal を貰った者も居る。彼等はまるで hunting-hawks のようであるが、“I”はそうではない。“I”が medal を貰ったのは、その賞状にある美しい形容詞を除いてみれば、結局“I”が America 人であるからであった。従って彼等は“I”に距離を置いている。“I”がこの物語で学ぶ最初のことはこれである。“I”が膝が曲らなくて苦しんでいる時、隣の機械で子供の手のように withered した手の回復訓練をしている major が居る。彼は戦前はイタリー1番の fencer であった。そして彼は自分でこの機械の効力を信じていないにも拘らず、極めて regularly に通院する。3篇の“I”物語が“I”の partaker としての役割を主として事件又は object を見て学ぶことに置いているが、この物語では“I”はこの major を observe して学ぶことになるのである。

この major は bravery を信じない。これは機械の効力を信じないことと共通しており、この cold-awake な態度は *A Farewell to Arms* の Frederic Henry が glory 等という空虚な言葉を信じないのと共通する。実体のない空虚なものを信ずることは illusion を信ずることで、現実の不条理に対抗することは出来ないのである。機械の効力を信じないのに彼は1日も欠かさず治療

⁴⁰*Ibid.*, p. 365.

⁴¹*Ibid.*, p. 367.

⁴²Cited in Young, *op. cit.*, p. 31.

⁴³*Ibid.* Marlowe の *The Jew of Malta*, iv, 1549-1551 に Thau hast committed-/Fornication? but that was in another Country:/And besides, the Wench is dead. とある。尚同じ箇所が T. S. Eliot の “Portrait of a Lady”にも引かれている。

を受けにやって来る。彼は自分が良くなると思って来るのではない。彼が“T” (Nick) が Italy 語の grammar の進歩が遅いにも拘らず“T” に grammar を指導するのと同様、軍人としての義務感、cold-awake な人間としての立場の確認という観点から続けているのである。彼が治療を受ける時の姿勢 “. . . he sat straight up in his chair with his right hand thrust into the machine and looked straight ahead at the wall . . .”⁴⁴ の示す如く、straight で代表される毅然たる態度である。それ故彼は“T” が結婚するつもりだと言うのを聞いて、“The more of a fool you are.” と言うのである。“If he is to lose everything, he should not place himself in a position to lose that. He should not place himself in a position to lose. He should find things he cannot lose.”⁴⁵ というのが彼の説の根拠で、彼は自分が負傷して前線にもどらぬということが判るまで結婚しないでいたのであった。その彼は妻の急死によって、自分が結婚することによって“a position to lose” に自分の身を置いていたということを知ったのであった。それ故“T” に「結婚するな」と言うのである。3日休んだ後 major は再びその効力を信じない machine で therapy treatment を受ける為もどって来る。敗れた為失った自己確立の再開である。“T” (Nick) が学ぶ教訓はこの“not to place himself in a position to lose” ということと、自己確立の cold-awake な straight な態度である。

“An Alpine Idyll” と “Cross-Country Snow” と同時期のものと思われるが、季節が晩春であることと、“T” が “I was a little tired of skiing. We had stayed too long.”⁴⁶ と考える所からみると、「何時までも skiing を続け度い」と望む後者よりは後の発展した思考段階であるが、未だ America には帰っていない。

この物語は Wiesbadenerhütte から Galtur に下って来た2人の skiers, Nick と John が church yard の脇を通って inn に着き、そこで食事をするまでの短い時間の見聞の記録である。5月になった今では skiing は既に無条件に楽しめるものではなくなっている。このことは Nick にとってあれ程効果的であった skiing の recuperation の力がもはや不要になっていることを示しているものと思われる。それだけ“T” が自信を回復したということであろう。物語の中で語られる1人の農夫が妻の死に際して為した奇妙な且つ不気味な振舞いのエピソードも、それ自体は非常に shocking で ghastly で sickly なものであるが、“T” はそれ程驚きもしない。ただ5月の陽光が物事を unreal に見せているので、それが真実かどうかを問うのみである。即ち負傷から回復し、精神を強化して、現実のさまざまな不条理に対抗する力に余裕の出来た“T” はこの話を idyllic に聞くのである。それ故にこの話を聞いた後で「気分が悪く」ならないで、食事をする気になれるのである。“The Killers” では Nick は現実の不条理、それに対する reaction の alternatives の無さに耐えかねて町を出ようと決心する。“An Alpine Idyll” では“T” はこ

⁴⁴ *First 49.*, p. 369.

⁴⁵ *Ibid.*

⁴⁶ *Ibid.*, p. 442.

の話を idyll と聞くことが出来る。即ちある事物 (object) を見た時、かく react すべきだという常識的行動・反応の規範にとらわれない。幻想を抱かず、狂暴・醜悪な現実 cold-awake な態度で立ち向うようになるのである。Disillusionment の世界にこの程度にまで入っているものと考えられる。

あ と が き

以上、Nick Adams の伝記物語を構成する短篇の分析的解釈を試みてきたが、この他に *The First Forty-Nine Stories* を構成している他の物語に Nick Adams 以外の名前を持ちながら、事実上これまで読んできた伝記上に位置を与えられることによって、その解釈に有効な光が当てられることが出来るものが多い。 (例 “Up in Michigan,” “Soldier’s Home,” “The Gambler, the Nun, and the Radio,” etc.) 又 invisible “I” が存在するとみなされる 3 人称物語 (“Mr. and Mrs. Elliot,” “Hills Like White Elephants,” “Fifty Grand,” etc.) もこの perspective を与えて読むことで、Hemingway 短篇の持つ曖昧さを解く手がかりが得られるものと考えられる。本稿は、従って、次に予定されているこれらの短篇の分析的解釈の先駆となるものである。